

私の義務

沖縄市立山内中学校3年 川根 紗貴

これまでの人生の中で税金の必要性について考えたことはなかった。むしろ、義務として税金を納めないといけないことに煩わしさなどの負の感情を抱いていた。だが、この作文を書くにあたって日々の暮らしを振り返ってみたところ、私が健康で、幸せに生きられているのは税金に支えられているから、ということに気づいた。

私は生まれた時からアトピー性皮膚炎の影響で普通の人より肌が弱く、今でも月に一度通院している。その度にたくさんの塗り薬や飲み薬を処方してもらっている。

体に数種類の薬を塗り、苦い薬を飲み続ける日々に嫌気が差し、処方してもらった薬を見るだけで憂うつになっていた時、ふと、通院の日の一日が頭に浮かんだ。受付を済ませ、先生から診断を受け、薬局で薬を貰い帰る。何年間も繰り返してきたルーティーンだが、思い返してみると疑問に思うことがあった。

それは、母が受付の際にピンク色の小さな紙を渡していたこと、お会計をしていなかったことだ。医療機関で保険証等を提示することは知っているが、ピンク色の紙については聞いたことがなかった。また、エコバッグがいっぱいになるほどの薬を無料で貰えるはずがないと思った。そこで私は、ピンク色の紙から読み取れた「沖縄市」「医療費」という文字を頼りに調べてみることにした。

調べた結果、私の住む沖縄市には「こども医療費助成」という制度があることが分かった。この制度では、健康保険に加入している中学校三年生までの子どもの医療費が一部の場合を除いて税金から助成される。制度を利用する際は、受付で受給資格者証を提示する必要がある。この受給資格者証こそが母が持っていたピンク色の紙だった。お会計をしていなかったことも、この制度によるものだった。

私が嫌だと跳ね除けていた薬は、たくさんの方が一生懸命働いて納めた税金でできていると、この時初めて気づいた。税金でできた薬を何の考えもなしに使い続けていたこと、私の体を支えていた税金に煩わしさを感じていたことを心から恥じた。

税や社会に対しての見聞を深め、納税の義務を果たせる大人になれるよう学び続ける。これが、税に対してあまりにも無知だった私への「義務」だ。これを実践し、大人になった時に今までに貰った税による恩恵を未来の子どもたちに返していきたい。